

図10. 相似地震活動から推定された準静的滑り速度の空間分布（左図）と時間変化（右図）。解析期間は1993年4月～2011年9月である。左図の太線と添字は、準静的滑り速度の時間変化を求める際の領域分けを示している。右図で示されている準静的滑り速度は期間長6年について求められたもので、値は中央時にプロットされている。右図中の黒横線は準静的滑り速度の平均値（鹿児島大学 [課題番号：2301]）。

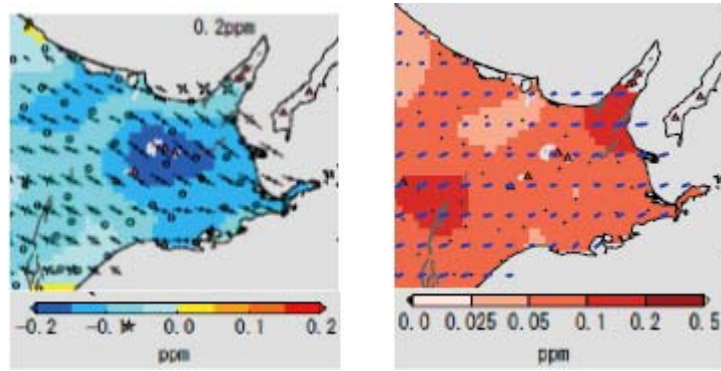


図11. 国土地理院F3 解とShen et al., (1996) の手法を用いて推定された面積ひずみ (左) 最大せん断ひずみ (右) 速度の分布 (北海道大学 [課題番号 : 1003])

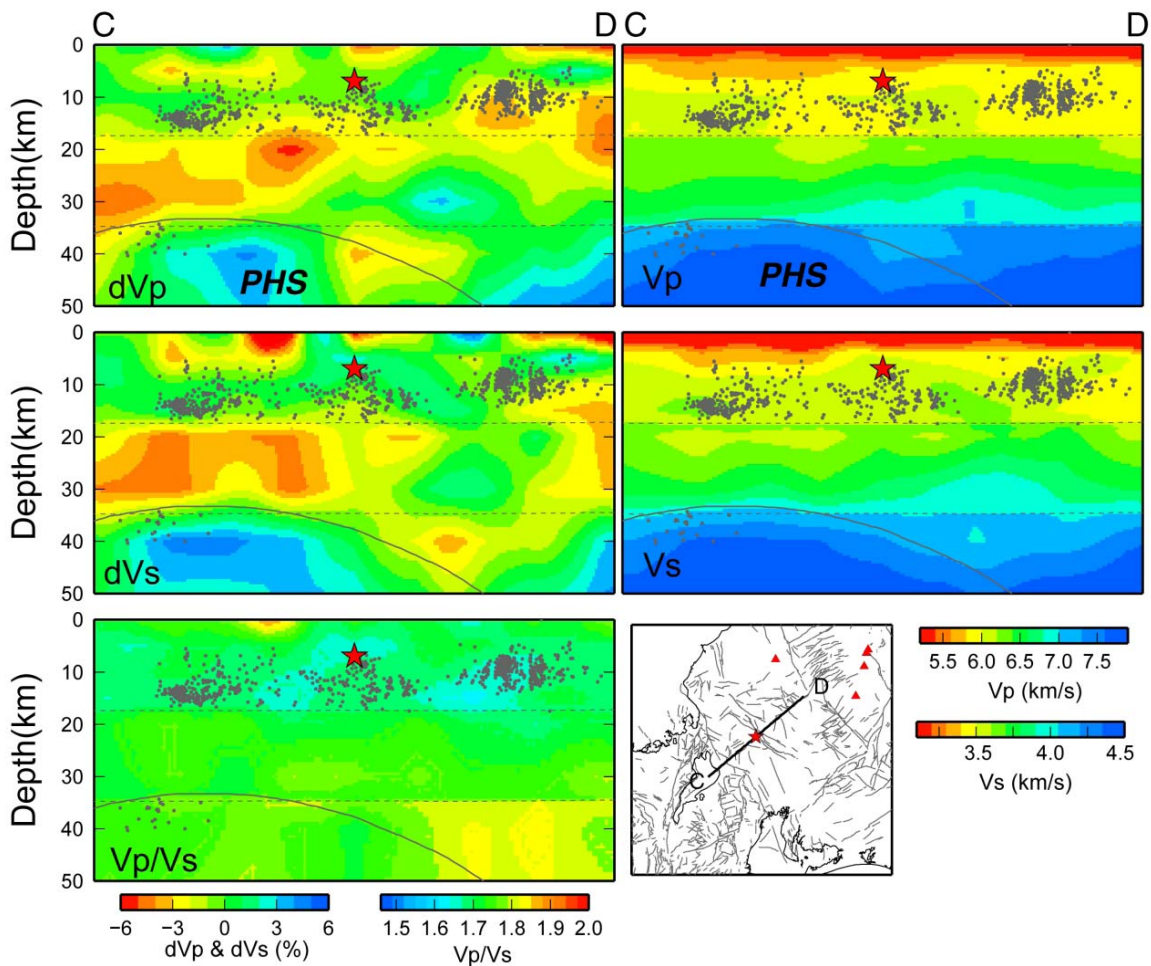


図12. 濃尾断層に直交する方向の鉛直断面図。赤星は濃尾地震の震源、灰色点は微小地震、灰色線はフィリピン海プレートの上境界 (東京大学 [課題番号 : 1407])。

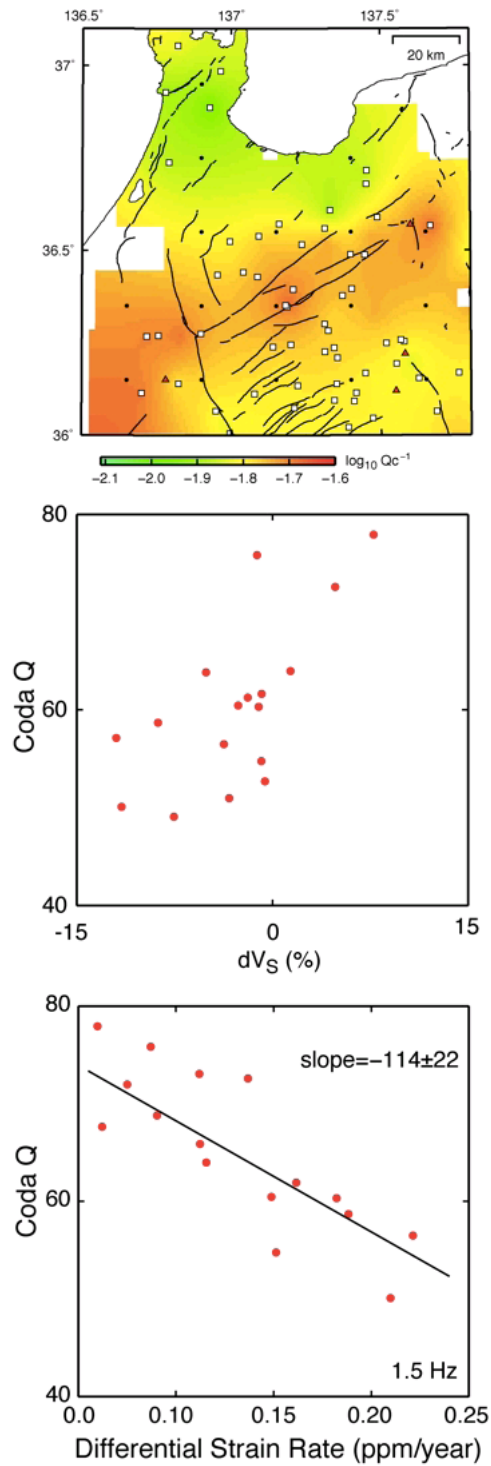


図13. 跡津川断層周辺の Q_c 推定結果。(上) 1.5 Hz の周波数帯における $\log_{10} QC^{-1}$ 値の空間分布。白四角は解析に用いた地震観測点, 三角は活火山, 黒線は活断層, 黒丸はS 波速度構造や差ひずみ速度との比較に用いた点を表す。(中) 深さ25 km におけるS 波速度の摂動と1.5 Hz の周波数帯におけるQC 値の関係。(下) 差ひずみ速度と1.5 Hz の周波数帯におけるQC 値との関係(名古屋大学 [課題番号:1705])。

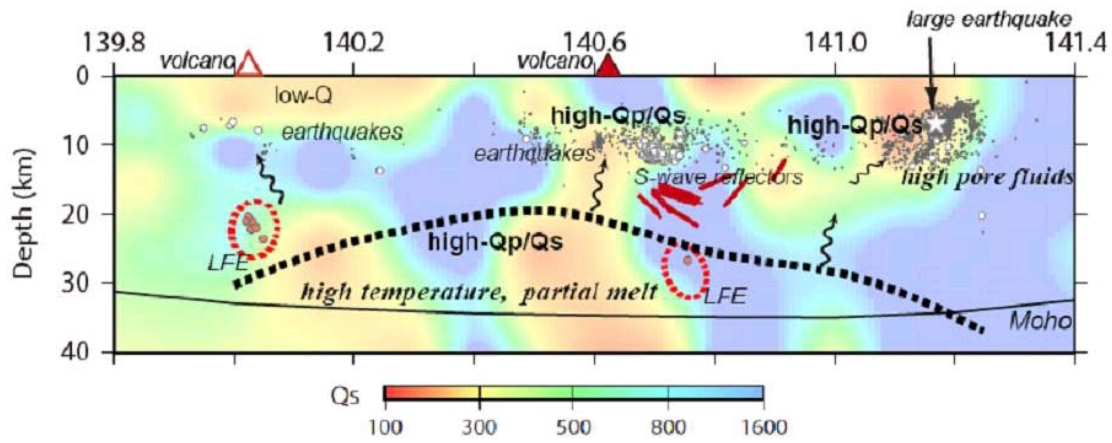


図14. 東北地方中央部，2003年宮城県北部地震震源域で得られた地震波減衰 (Q_s) 構造の東西断面。黒点・白丸は，東北地方太平洋沖地震発生前及び後に発生した地震である。▲は火山を示す。赤丸は低周波地震 (LFE) を示す。赤太線はS波反射面 (堀・他，2004) を示す (東北大学 [課題番号: 1207]) 。

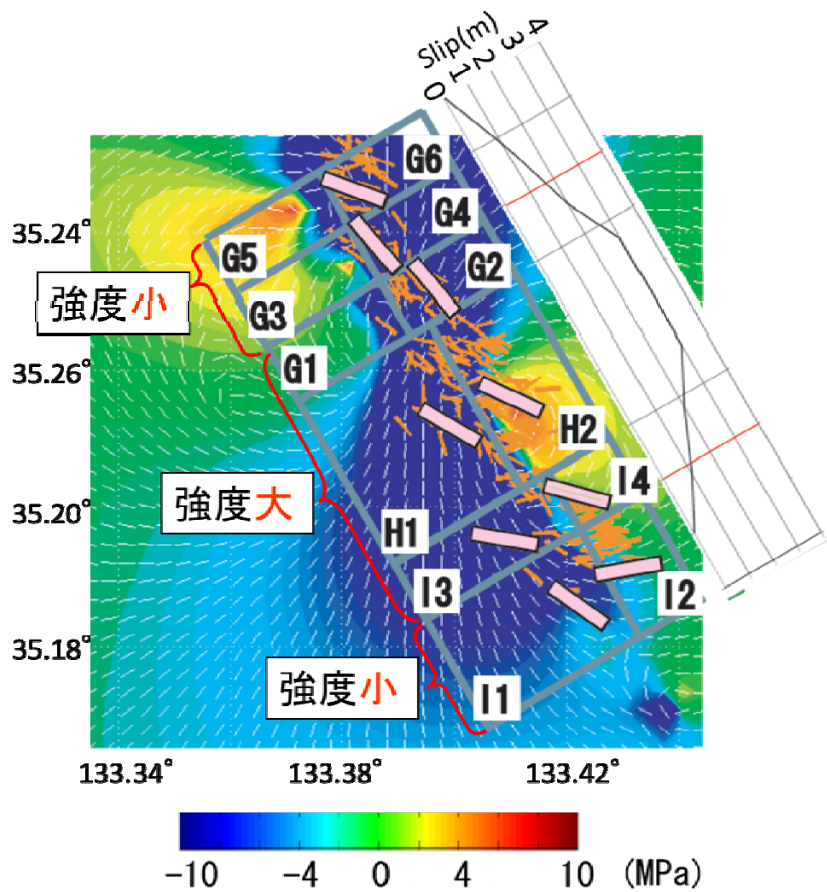


図15. 応力逆解析によって推定された、鳥取県西部地震の大滑り域近傍((深さ5-10km)における σ_1 の方位分布(ピンクの太線)。深さ7kmにおける本震による静的応力の空間変化(白細線)と比較している。オレンジ線は同じ深さにおけるP軸の方位分布。滑り分布は岩田・関口(2002)による(京都大学防災研究所[課題番号:1808])。